

1 次の文章を読んで、あとの問1から問6までの問いに答えなさい。

この文章については、省略します。
(この文章は掲載不可のため)

(平山郁夫『絵と心』による)

2 次の問1、問2の問いに答えなさい。

問1 次の文中の傍線部のカタカナに適した漢字を、

あとのアからエまでの中から選びなさい。

春の陽気に包まれながら、野山をサンサクする。

問2 次の文中の「」にあてはまる最も適当なことを、

あとのアからエまでの中から選びなさい。

すばらしい演奏を聴き、感動の余韻に「」。

ア 沈む イ 浸る ウ 注ぐ エ 浮かぶ

3 次の文章を読んで、あとの問1から問5までの問いに答えなさい。

〔本文にいたるまでのあらすじ〕

東京の中学校を卒業した川嶋有人は、訳あって親元を離れ、叔父が医師として赴任している北海道の離島にある照羽尻高校に進学した。六月、水産実習の授業の一環で、島の名産のウニを物産展に出品することになり、斎藤誠、東村桃花、八木陽樹（ハル先輩）、野呂涼（涼先輩）とともにディスカッションを行ったが、有人は思うようにアイデアを出すことができなかった。二度目のディスカッションが行われた日の放課後、有人はウニを分けてくれるという誠の家を初めて訪れた。

〔本文〕

1 小声で「お邪魔します」と言いながら、誠について中へ入ると、沓脱からすぐの茶の間はドアが開け放たれており、中が丸見えだった。日焼けをした中年男性の顔がこちらを向いた。せいかな顔つきは誠にそっくりだ。「有人。これが俺の親父。この島一の漁師で、照羽尻高校の先輩」「またおまえは、この島一とか適当なこと言いやがって。他の漁師に失礼だべ」誠の父はシャツにステコというラフすぎるスタイルで、座布団の上で片膝を立て、鮭とばをかじっていた。体格は誠より一回り小柄だが、全身にがっちりとした筋肉がついている。「あんたが

川嶋先生とこの有人か。先生には世話になってる。よろしく言っといてくれや」島内で叔父リスベクトは挨拶言葉みたいなものだ。それだけ慕われている叔父を誇らしく思うのと並行して、有人は「その叔父のおい」である自分自身への評価が気になってくる。東京にいたころの比較対象は兄だったが、島ではまさか、叔父に比べてあのおいは、となつてゐるのか。しかし、誠の父は^①思いがけなくも破顔したのだった。「有人。ありがとうな。おまえが来たつて誠がえらい喜んでるんだわ」「親父、余計なこと言うな」「なんも余計なことだねえべ。おまえ毎日言つてるべ。やつと同じクラスに男友達が出来たーつて。ええ？」

2 突つ立つてないで座れ座れと座布団を渡され、有人はちんまりと正座する。木製の丸い座卓を中央に配した茶の間はいささか狭く、テレビやサイドボードなどの一般的な家具家電のほか、ラジオ、ファックス付き電話機、新聞紙、書類といったものが床の上に転がっている。雑然としていて、お世辞にも片づけられているとは言えない。しかし、港に向けた窓からは、先刻教えられた誠の父の船がよく見えた。それがこの漁師の心意気を物語っているように感じられた。隣の台所から、鼻歌が聞こえた。聞いたことがあるようなないような歌だ。夜明けの来ない夜はないとかなんとか繰り返すのを、誠の父はふんと笑った。壁には額に入つた表彰状が幾つもあつた。人命救助の表彰だ。「海難事故があつたら、船持つてゐる人間が助けるのは当たり前だべ。他の漁師

の家にだっていくらもある。俺らは救命講習も受けてんだ」表彰状を見つめる有人に、誠の父がこともなげに言い、台所に声をかけた。「母ちゃん。下手な歌、歌つてねえで、有人になんか出してやれや」「今持つて行く」明るい声が返つてきたのとほぼ同時に、オペラ歌手を思わせる、恰幅^{かつぐ}の良い女性が現れた。漁師の夫よりも大きい。誠の体格は、どうやら母親似のようだ。「有人くん、よく来てくれたわね。おばちゃん、うれしい」誠の母は、コップに入つた炭酸飲料と菓子を盛つた器、それから洗つて水を切つたサクラランボをザルごと座卓に置き、それぞれにおしぼりもくれた。「すつげ！ サクラランボなんて久しぶりだよ」「そりゃあ、有人くんが来るんだもん。買つとくわよ。さあ、食べて食べて。有人くん細つこいからいっぱい食べて」「親父、有人にやるウニは？」ちゃんととつてある。さつき母ちゃんがさばいたばかりだ「あれも食べ、これも食べる。有人は今まで友人の家に行つてこれほどの歓待を受けたことがなかった。そもそも東京では、友人の家に遊びに行くこと自体、ほとんどなかった。小学校低学年のころにあつたかもしれないが、それきりだった。この島は一つの家族みたいなものだと叔父が言っていたのを、思い出した。有人は勧められるがまま炭酸飲料を飲み、菓子を食べ、合間にサクラランボを口にした。自分しかない部屋と、風の音と海鳥の鳴き声しかない断崖絶壁の光景を、救いを求めるように思い起こしながらも、斎藤家に歓迎されている事実が消しにくくなった。おせっかいで距離が近すぎて面倒くさい。一人

になったらどつと疲れるだろう。でも、自分が受け入れられていることはうれしかった。(中略)

3 次に行われた水産実習のディスカッションで、有人は思い切って口を

開いた。〈1〉「誠んちからもらったウニ食べて思ったんだけど……」

生ウニの味には絶対勝てない。〈2〉「獲れたて生ウニの味は絶対に無理だ。でも生ウニの形状に近いものを出したら、逆に期待させてしまう可能性はある。だとしたら、いつそうんと加工して、最初からペー
ストにするとかだと、形は無くなってもいいから、ミョウバンは使わずにいけるかもしれない。使うとしても、最低限で済むかなって……」

有人は東京で食べたウニのクリームパスタの話をした。〈3〉「手汗がにじむ。『これは、パスタにあえるウニクリームソースだって、もう用途をこつちで決めてしまえば……そうしたら、口にする人は生ウニの味を絶対期待しないし、こういう調理に使うってわかってたら、買う人も買いやすいし、調理のときに好みで味付けするだろうし、もちろんこつちでも買った人がアレンジできる程度でベースの味を付けると、アルコールとかの味も紛れるし……とにかく添加物を極力少なくできる』どういうふうに話すか、前夜から頭の中でシミュレーションしたはずなのに、全然うまくいかなかった。〈4〉「有人は何度もつかえ、声を上ずらせ、言葉を途切れさせた。『ベースの味は……こないだ涼先輩のお母さんからもらったタコの煮つけが、なんかヒントになるかなって……普通に東京で食べてたのと違う味がして。深みがあつ

たというか。魚醬ぎょしょうっていうのを使っているんじゃないかって、叔父に聞いた。その……タラを使った魚醬を隠し味にしているんだろうって。

漁協で作ってるんだよね、タラ魚醬。それ、こつちの味付けに使えないかな」途切れ途切れの言葉なのに、他の四人は茶々の一つも入れず、ずっと真剣に有人の話をうなずきながら聞いた。「だから……ウニのクリームパスタソースって限定するのはどうかなって」

4 少しの沈黙ののち、誠が言った。「ウニのクリームパスタ？　なんだ

それ。うまいのか？」「おいしいよ」桃花だった。「私も札幌さっぽろで食べたことある。好き」「マジ？　桃花が言うならいいんじゃない？」「僕は食べたことないけど、ペーストにするのはいいと思う」ハル先輩が淡々とメリットを指摘した。「ミョウバンの点はもちろん、最初から崩れていてもいいなら原価を安く抑えられる」「え、有人くんの見解、普通に良くない？」涼先輩も賛同してくれた。「ウニのクリームパスタとか、めっちゃやおしゃれじゃない？　これでいこう？　めっちゃいけそう！」誠、ハル先輩、桃花はためらわずうなずいた。「良かった、やっと方針が決まったね。有人くん、すごい」涼先輩が胸の前でかわいらしく拍手する。誠も「やるじゃんか」と親指をぐつと立てる。「パッケージのデザインはどうするの？」ハル先輩が一歩立ち止まれば、涼先輩が桃花の手を取り「私たち二人がめっちゃかわいいの考える！　男子はキヤッチコピーみたいな考えて」と、三歩先に進む。注がれている視線に気づいて、有人はそちらに顔を向けた。教室にいた校長と森先生もり

が、そろって恵比須えびすのような笑顔で有人らを見守っていた。「有人、すげーなおまえ」隣の誠が肩をたたいた。「おまえじゃなきゃ出ない意見だぜ。俺もそれ食ってみてー」

5 おまえじゃなきゃ。誠の言葉は小さな火花を有人に飛ばした。飛んできたそれは有人の心に届いて、ささやかではあるが、確かな熱を与えた。熱があれば、なにかが芽を吹く。もう寒々しいだけじゃない。今までとは違う。変わるかもしれない。そんな予感に、有人の胸は高鳴った。

(乾ルカ『明日の僕に風が吹く』による)

(注) ○ **1** **5** は段落符号である。

○ 沓脱くつめぎ〓玄関や縁側などの上がり口にある、はきものを脱ぐところ。

○ ステテコ〓膝の下まであるゆったりとした男性用の下着。

○ ラフ〓くだけたさま。

○ 鮭さけとば〓棒状に切った鮭の身を塩水につけ、乾燥させた食品。

○ リス。ペクト〓尊敬する気持ち。

○ 恰幅かつぶく〓体つき。

○ ペースト〓食材をすりつぶし、柔らかく滑らかにした状態のもの。

○ ミヨウバン〓食品添加物。食品の形状保持などに使用される。

○ シミュレーション〓ここでは、実際の場面を想像して練習すること。

○ 魚醬ぎょしょう〓魚介類を塩漬けにして発酵・熟成させて出てくる汁をこして作った調味料。

○ 茶々〓人の話の途中で割り込んで言う冗談。

○ 恵比須えびす〓七福神の一つ。にこにこした顔つきのことをえびす顔という。

次の漢文（書き下し文）を読んで、あとの問1から問4までの問いに答えなさい。（本文の……の左側は現代語訳です。）

冬、晋存りに餓う。糴を秦に乞はしむ。秦伯、子桑に謂ふ、「諸を与

へんか。」と。対^{こた}へて曰^いはく、「重く施して報いば、君、將^はた何をか求
めらるること
何も求めること
はないでしょう
お客^{きやく}えして言う
ことには
おおいに恩恵^{おんゑ}を施して、晋
がその恩に報いたら

めん。重く施して報いずんば、其その民必ず攜はなれん。攜れて討たば、衆無①きん。
……
離はなれる……
でしょう

くして必ず敗れん。」と。百里に謂ふ、「諸を与へんか。」と。対へ

て曰はく、「天災の流行するは、国家代はるがはる有り。災を救ひ隣を

あはれ
恤むは、道なり。道を行へば、福有り。」と。ひてい
不鄭の子、豹、秦に在
るに、人を行ふべき道である

り。晋を伐^うたんことを請^こふ。秦伯曰はく、「其^③の君^こはれ悪^あしきも、其^④の

民何の罪かある。」と。秦こゝろ是おに於いて、粟ぞくを晋いたに輸す。

しゅんじゆうさしでん
『春秋左氏伝』による)

(注) ○ 晋、秦Ⅱともに、春秋時代の国名。

- 晋、秦とともに、春秋時代の国名。
- 秦伯しんぱく 秦の君主。
- 丕鄭ひてい 晋の家臣。晋にむほんを起こして殺された。
- 豹へう 父の丕鄭が殺された後、秦に亡命した。
- 栗ぞく 穀物。